

良忠『観経疏伝通記』における 引用について

研究員 大橋 雄人

良忠の著作において、その引用典籍の数は膨大なものであり、またその引用典籍の分野は浄土教関連の典籍にとどまらず、經典、論疏、また外典や歴史書まで広く用いられている。本研究では善導『観経疏』の注釈書である『観経疏伝通記』（以下『伝通記』）を取り上げ、『伝通記』における引用典籍について概観し、良忠がそれらの典籍をどのようなかたちで引用しているか、その傾向について検討を行った。

良忠は典籍の引用に際し、全文、取意、典籍名もしくは諸師名などの提示など、さまざまな形式で引用を行っている。『伝通記』では、經典は五〇以上、論疏等は一二〇以上、ほか目録、伝記類、字典類、歴史書などの引用も合わせると計二〇〇以上の典籍がみられ、引用箇所は二〇〇〇箇所以上を数える。しかし典籍別に引用の回数をみると、大半が一〜四回ほどの引用であり、五回以上引用される典籍は、七〇ほどに絞られる。そのなかでもとくに元照『観経新疏』の引用が圧倒的に多く、また浄土教典籍以外では、『法華経』関連、および俱舍、唯識関連などの典籍もあり、後者は『伝通記』にみられる良忠の口伝以外に良忠と南都浄土教との関連をうかがわせるものである。

ただしこれらの引用がすべて原典から引かれたものかというところではない箇所がいくつか見受けられた。例えば、良忠は『伝通記』において『観経疏』玄義分、十四行偈の「正使盡未盡、習氣亡未亡」（『浄全』二、一頁上）という一文を釈するなかで、「問、三賢十地に約して云何が正習の斷位を判ずるや」（『浄全』二、九六頁上）という問いを設け、斷惑の位について華嚴、天台、三論、法相の教説を紹介している。その三論宗の教説を述べるなかで吉蔵『大乘玄論』、同『法華経統略』、同『勝鬘宝窟』、珍海『三論名教鈔』が引用されているが、これらの典籍は珍海『三論名教鈔』に引用される典籍と説示に重なる部分のみみられた。これは①諸師の著作を参照し、そこに引かれる引用を抄出して示したものとみられる。

このほか、②典籍の引用を、参照した典籍名を明示しながら引用を行う例、③参照した典籍を明示せず、そのなかの引用を用いる例などがみられた。このような引用の手法は当然、良忠に限ったものではないが、とくに①のような傾向を詳細に整理することによって、良忠が逐語解釈・逐文解釈の際にどのような典籍を参照したものが明確にされ、良忠の教学背景・思想背景がさらに明らかになるものと考えられる。